

住むことの情念 ——マドレーヌ・シャプサル著 『翡翠の家』と他動詞 〈habiter〉

西 川 祐 子

1. 自動詞 〈habiter〉 と他動詞 〈habiter〉

マドレーヌ・シャプサル著『翡翠の家』(Madelaine Chapsal; La Maison de jade, Grasset, 1986) を紹介した沖田吉穂は「マドレーヌ・シャプサルと住居の寓話」(『フランス』1987年6月号)の中で次のように書いている。

「『住む』habiter という動詞が他動詞でもあることは、フランス人の住居に対する意識にとって、われわれとは相当に異なる所与なのではないかと思うことがある。住むとは場所の占有であり、その排他的性格には暴力性さえ潜んでいるからこそ、人を招くことにも意味を持ち、『ここは君のうちだよ』Tu es ici chz toi! という言葉が愛するものの与え得る最も美しい約束たり得るのではないか」

共同研究の今回のテーマは日本語〈すむ〉と各言語の対応語、フランス語では〈habiter〉との意味範囲の重りとずれの対照研究である。さっそくこの小説を入手して読んだ。

わたしたちも丁度、フランス語〈habiter〉が自動詞でもあり他動詞でもあることを問題にしていた。水野論文にあるように、統辞論的にみて、自動詞を用いるべき場合と、他動詞を用いるべき場合を区別することは可能である。しかしどちらを用いてもよいと思われる場合、そのニュアンスの差をつかむことが難しい。

「彼(彼女)はある(その)家に住んでいる」は、動詞 *habiter* を用いて2通りのフランス語文に翻訳可能である。

A. Il(Elle) habite dans une(la) maison.

B. Il(Elle) habite une(la) maison.

A. 文に用いられた *habiter* は自動詞, *dans* が無くて直接に目的補語をとる形の B. 文における *habiter* はいちおう他動詞と考えられる。

A. と B. の二つの文章にもし違いがあるならその違いを説明するようにフランス語を母国語とする何人かの人に求めると, その多くが困惑を始めた。B. のような文章は実際にはあり得ないのであって, 直接目的補語 *une maison* (家)には, 何らかの付加形容詞が必要である, たとえば, Il(Elle) habite une maison japonaise. であれば, 彼(女)は日本家屋に住んでいて, 洋館その他に住んでいるのではないという意味である, その場合, A. の構文はとらない, という答があった。

また A. は, 一軒の家の一部分たとえば一部屋だけに住む場合, B. なら一軒全体に住むというちがいがあある。または A. は一つの敷地の中にある一軒の家の中だけ住み, 庭は彼(女)の占有の外にあることをはっきりさせるような場合に使う, と説明した人もいた。

A. と B. にはニュアンスのちがいはない, *dans une(la) maison* は, 間接目的補語ではなく副詞的表現または状況補語であり, B. では状況補語句のうちの前置詞が省略されているにすぎない, B. の場合をとくに他動詞と考える必要はない, 一般に縮約 (*contraction*) が現代の文章の向っている方向なのだ, と言い添えた人もいた。このような短い例文を比較して論ずるかぎりでは妥当な意見であって, 雑誌, 新聞の文章, また論文でも社会科学分野の文章を書く人は好んで A. より B. すなわち縮約文を書く傾向がある。日常会話も B. の方が多いであろう。じっさいパリでは B. が多いが, 地方では A. が好まれると答えた人さえあった。

だが, B. が A. の縮約であるとしても, 定冠詞つき名詞 *la maison* を

代名詞におきかえると、

A. Il (Elle) y habite.

B. Il (Elle) l'habite.

となる。B. の habiter は直接目的補語人称代名詞の女性形 la をとる以上、他動詞と考えるべきではないか。再度、同じ人になつねると、A. と B. には違いはないと答えた人から今度は、B. には話者がする一種の力説、固執 (une insistance) のニュアンスが感じられるようにおもうという回答があった。心理的なニュアンスの差を説明しようとして、比喩を用いて語った人もいた。一人は、主語を三人称よりも一人称とした方が説明しやすいと言った。

A. J'habite dans une (la) maison. J'y habite.

B. J'habite une (la) maison. Je l' habite.

という2つの文章をくらべると、A. のほうが家にたいして心理的距離を置いた言い方であり、B. の場合、まるで衣服にくるまるように家の中にぴったり収まる感じだと言う。

別の回答者はまた、B. のように他動詞として habiter を用いると、積極的な働きかけが感じられ、ほとんど獲得する、あるいは所有する (prendre possession de) という意味だ、と答えた。

〈habiter〉が他動詞であることが疑いの余地がないのは、受動態をとる場合であろう。フランス語は、たとえば英語とくらべると、受動態の使用をさける傾向がある。家が住まれている、とわざわざ受け身の表現がなされると、占有行為はひときわ強く印象づけられる。受動態表現がとられることが多いのはとくに次のような場合である。

La maison est habitée par l'esprit (par le souvenir).

すなわち霊にとりつかれた家、思い出につきまといわれている家、さらには幽霊屋敷といったイメージが受動態表現によってつくられている。この場合、他動詞 habiter には、たしかに自動詞〈habiter〉にはない強い情念

がこめられていると言えよう。

だが短い例文を前にして被験者に語ってもらう試みには限界がある。

〈habiter〉を鍵ことばとして用いた『翡翠の家』は、一つの物語全体のコンテキストの中でこの動詞について考えることができる点で興味をそそるテキストである。むろん、この場合、鍵ことばに作者がこめた意図に従って読むことになるのだから、そこからひき出された結論をすぐさま一般化してはいけなであろう。この小論はあくまでもシャブサルの小説についての個別的な考察である。なお小説中〈habiter〉は16回用いられ、うち13回は前置詞を伴わない形で用いられている。一つ一つの例文をとりだせば、前置詞を省略した自動詞とも考えられるのであるが、用例の全体ではどうであろう。

2. 通俗恋愛小説の条件

1988年春、わたしはフランスに短い滞在をした。このときにはシャブサルの『翡翠の家』はすでに普及版がつくられて、書店だけでなく、駅の売店にも積まれ、広く読まれていた。地下鉄の中で、翡翠の緑の色をしたビニール表紙の本を読んでいる乗客を見かけるのもしばしばであった。この小説はベスト・セラーとなる条件として、新しさというよりは通俗性をより多く具えている。

第1に、物語の筋の通俗性を指摘することができる。作者自身を思わせる年上の女が、名優ジェラル・フィリップによく似た美青年だが拝金主義者である年下の恋人ベルナールに、4年のあいだすべてを捧げてつくしたあげく捨てられ、家を追い出されるという筋書はありきたりである。だが場所や日付の設定の細部が具体的で生々しく、フランスの読者たちは、かなり洗練された言いまわしの打ち掛け話に耳を傾けるようにして読んでいると見うけられた。著者シャブサルは数冊の小説作品の他にシャネルの伝記、数多くの著名人のインタビュー記事、対談形式による評論『嫉妬』⁽¹⁾を書いたジャーナリストとして知られている。この小説にはカミュとわかる

小説家が女主人公に送った恋文まがいの手紙が引用されたり、シャンソン歌手ミレイユ・マチューにちがいない女性歌手が中国公演旅行の途中で見たと語る翡翠でつくられた寺の話から小説の題名がとられたりしている。著者のジャーナリスト体験の秘密をこっそりと読者にもらして好奇心を満足させる戦術である。そして何よりも、シャネルの服をまとう女主人公は著者自身であると随所に臭わすことによって、この小説はシャブサルが自分で自分自身について書いたゴシップ記事からつくられているということができよう。

第2に、文体の通俗性がある。紋切型表現と既成のイメージの多用は、通俗小説の特色であろう。『翡翠の家』ではとくに、失恋して自殺をはかった女主人公が未遂におわたのち、精神科の医師から精神分析治療を受けながら書く手記の形をとっている。そのため精神分析の用語や、心理分析、イメージ解釈が小説のいたるところに散りばめられている。

女主人公は不妊症が過去の離婚とこのたびの失恋の原因だと考えている。その固定観念も手伝って、「すべての女の体は、一つの家である」と言う。「小さな家」と呼ばれる恋人の幼年時代の家をあらゆる犠牲をはらって買戻し、自分の好みの家、自分に似てさえいる家につくりかえ、そこに恋人を閉じこめて一人前の男に育て上げようとする。しかし恋人は「僕が子どもをつくりたいとおもうようになったのは、あんたのせいなんだ」と女主人公に告げ、若い女と結婚するためと称して年上の女を追い出す。

人類学者は、いわゆる未開社会には住居の各部分の名称や、台所、ベッドの配置が身体の比喩そのものとなっているものがあることを教えている。⁽²⁾ バシュラールは『空間の詩学』においてフランスの民家の構造の読み方を教え、「家の母性」⁽³⁾という表現も用いた。家を女の体になどえて子宮回帰の願望を語るというイメージ解釈はその後いたるところで行われ、すでに一種の紋切型となっている。

小説の中に登場する医師、精神分析家は女主人公の年下の青年にたいす

る執着は母性愛の代償、搾乳行為であったと解いてみせることによって患者の失恋を慰め、青年の裏切りを一種の成人式として認めさせようとするかのようだ。女主人公はこの解釈を受け入れて自分でも、「一生のうち四年間を彼をつくることにすすんで身を捧げた」、彼は自分の作品であると述べ、しかし男は自分で成長するものでつくられるべきではなかったのだと認める。だが執着のもう一つの対象であった「小さな家」から退出する際には、その家の自分だけが知る秘密の場所に実業家となった恋人の中国旅行土産である翡翠の指輪を隠して、やがて家全体が翡翠の家すなわち女主人公の身体となって輝きわたるように呪いをかける。

ミレーユ・マチューらしき女歌手が、中国には翡翠でできた寺院があり、その建物全体は女の身体を象徴すると女主人公に教えたことになっている。その寺はじっさいには、おそらく上海の玉佛寺であろう。この寺は、全身が貴石からつくられ妖艶な印象を与える佛の横臥像があることで知られ、観光コースに組入られている。この場合、翡翠であるのは仏像であって建物ではないのだが、小説の中の女主人公の解釈は偏執狂的に強引である。小説には現代において精神分析医と同じく流行しているオカルト的な予言者が登場し、女主人公の身近かに死が起ると占う。予言のとおり、女主人公を捨てた青年はその後たびたび恋人をかれ、再度の中国旅行のあいだに行方不明となる。なお、女主人公によれば、中国は、母と娘はいるが、女のいない男性的社会である。これもフランスでは一般に流布している現代の神話の利用と言えよう。

『翡翠の家』の通俗小説としての性格の第3は、フランス社会に根強い持ち家願望が小説の中心テーマとなっていることである。この小説には約20の家が描かれている。登場人物の数よりも家の数の方が多い。なぜなら彼らのほとんどが資産をもつ中産階級の出身であって、パリ市内のアパルトマン、日本語で言うところのマンション (un appartement) に住みながら他に、郊外の小さな庭つきの分譲住宅 (un pavillon de banlieue) か、

伝統的な家 (une maison), 別荘 (une villa), 館 (un hôtel particulier) あるいは城 (un château) ときにはその上にリゾート地のワンルーム・マンション (un studio en montagne) を所有しているからである。登場人物の紹介は必ずその人物の持ち家にふれる。

“Rolande vit dans un bel et cher appartement, ce dont je la félicite”⁽⁴⁾

「ロランドは、私が彼女を祝福したいとおもうような美しい、高価なアパートマンで暮らしている」

最初、このような紹介は物語の展開には関係がなく、また「美しく高価」という形容もほとんど無意味であるように、わたしには思えた。十九世紀リアリズム小説においても家の描写は不可欠であったが、小説家はそれぞれ、もっと個性的な叙述を工夫したものである。

ところが『翡翠の家』では女主人公の所有であった郊外の家の描写にしても、次のように簡単である。

“Et puis je possédais une maison, en fait un pavillon de banlieu dans le sud de Paris, non loin d’une ville nouvelle. Je venais de m’y installer. Trois pièces et un jardinet plus réduit encore qui n’avait que deux arbres, un cerisier et un pommier, si rapprochés qu’ils mêlaient leurs branches.”⁽⁵⁾

「それから、私は一軒の家を持っていた、じっさいには郊外の建売住宅であって、パリの南方、新しくできた町から遠くないところにあった。私はまだそこに落ち着いたばかりであった。三部屋の家であり、木が二本あるだけの、家よりなお小さな庭つきであった。サクラの木とリンゴの木はあまりに近く植えられていたため、互いの枝をからませていた」

家の規模と立地条件は、上の短い文章の中に正確に書きこまれている。読者は、ただちにこの家の値ぶみをすることができるであろう。じっさい

上の記述は《Maison de France, informations immobilières notariales (公証人が扱う不動産情報, フランスの家)》といったフランスの住宅情報誌の記述によく似ており、価格が書いてないだけの違いである。

伝統的な家については、地名のコンノタションが利用されている。「ブルタニュー地方のレ島」といえば、バカンスの地のいわば民宿を読者は思い浮かべる。「地中海沿岸, カヌのほど近くにある別荘」なら、中流のかなり上、「ヌイイの規模的な館」と「イール・ド・フランスの人里はなれた場所」にあって、生け垣が家をかくしている」なら、大ブルジョアの世襲財産と想像される。「川のほとりに立つ小さな城」までである。

“La Maison de Cognac est un rêve. Tout y est luxe, raffinement, beauté. (...) Dans cette propriété, qui est un domaine, il y a aussi une piscine, un manège, un haras, des tennis.”⁽⁶⁾

「コロニーの家は夢そのものである。(…) すべてはぜいたくで、洗練されており、美しい。この領地というほどの私有地には、プール、調馬場、種馬飼育所、テニスコートがある」

といった文章は、まるでグラビア写真が豪華な建築雑誌の解説のようである。《La Maison et Travaux (家と工事)》, 《Chez moi (わたしの家)》といった無数の建築、改造、改装の雑誌、室内装飾の雑誌は、毎号のように各地方の民家の特集をやり、美しい邸宅の紹介をしている。現在、フランスの建築関係の雑誌は専門誌の他にファッション雑誌化して発行部数をふやしている。大通りの新聞雑誌店、駅の売店に並べられている建築関係の雑誌の種類は、服飾雑誌の数をしのぐ勢いである。服飾雑誌の場合と同じく住宅雑誌も実用目的の域をすでに越え、見て楽しむ雑誌となって読者層をひろげている。

『翡翠の家』の読者は、この豪華なグラビアのページをもった住宅雑誌の読者と重なるのではないだろうか。『翡翠の家』の家の記述は、紋切型表現に満ちているところか、ほとんどコードだけなのである。読者の記憶の

中にはグラビア写真のイメージが大量に貯蔵されており、コードはその記憶を適当にひきだす。住宅雑誌の読者が共有するコードをそのまま借用するのであれば十九世紀小説のような一つ一つの住居に個性的な描写は不要となる。

そしてパリの各地区のアパルトマン、郊外の建売住宅、伝統的な家、別荘、館、城といったコードは全体で欲望の体系を形づくっている。欲望は嫉妬と模倣から生まれてきりが無い。フランス社会の人びとのほとんど全てがこの欲望の体系に組込まれており、『翡翠の家』はこの体系を巧みにとり入れ、これによりかかって書かれている。ベスト・セラーとなったのも不思議ではない。この小説には恋愛の物語の他に住居の物語があり、後者は前者の比喩、寓話となっているというより、関係は倒立し、住居の物語が生長してゆくのである。

3. 〈habiter〉の情念

小説の冒頭には、恋人の口から発せられ、女主人公を傷つけたことは「僕たちのあいだはもう終わりだ。出てゆけ」がある。恋を失ったことよりも、ついに住まなかった家の記憶がその後長く、女主人公を苦しめる。ここでは〈habiter〉は静的な状態ではなく積極的に働きかける行為である。

“Et puis il y avait la maison. Notre maison. La première maison de ma vie que j’installais en fonction de mon goût et de mes besoins. J’en avais vérifié chaque détail. En rêve, je l’avais déjà meublée, habitée, dressant la liste des personnes que j’inviterais à la pendaison de la crémaillère.”⁽⁷⁾

「それから、あの家があった。私たちの家。私の生涯で最初の、私の好みと必要にあわせて居を定めた家。私はあの家の細部までを確認していた。夢の中で、わたしはすでにあの家に家具をすえつけ、住み (l’avoir habitée)、新居の披露宴に招く客のリストを

つくりあげていた」

女主人公は、失恋によって相手を失うというよりも自分を失ったことを嘆いている。自分とは、女主人公が買戻して二年かかって改造し、そこに恋人と共に住み、そこで死ぬはずであった恋人の幼年時代の家、「小さな家 (la petite maison)」と呼ばれる家のことである。

“Casser ce fève d'habiter pour la première fois de ma vie une maison qui me ressemble m'est impossible sans me casser moi-même”⁽⁸⁾

「生まれてはじめて私に似ている家に住む (habiter une maison qui me ressemble) という夢を壊すには、自己破壊せざるを得なかった」

「私に似た家」はボードレールの詩句をおもわせる。「旅への誘い」⁽⁹⁾の中で詩人は「わが子よ、わが妹よ、／思ってもごらん／彼の地へ行って一緒に暮らす楽しさを！ (d'aller là-bas vivre ensemble !)／心ゆくまで愛し／愛して死ぬ／おまえによく似たあの国で！ (Au pays qui te ressemble!)」とうたった。

フランス語では男と女が「一緒に暮らす (vivre ensemble)」と「一緒に住む (habiter ensemble)」はほとんど同じ意味、日本語の語感でいえば「同棲」の意味に用いられる。ニュアンスの差はある。互いに無一物であっても、一緒に暮らすことはできるが、一緒に住むのであれば、空間の共有、互いの持ち物のまざりあいといった現象が想起される。

また、ボードレールの「おまえによく似たあの国」は恋人おそらくジャンヌ・デュバルの肉体であって、ボードレールは相手への合体の願望とその至福をうたっているのであるが、シャプサル「私に似ている家」は自分自身である。ボードレールもシャプサルも、家や土地を体現するのは女性でなければならないかのように似た比喩を使うのだが、これはシャプサルにとっては矛盾ではなかろうか。子宮回帰の願望はむしろ男の願望であ

り、女の身体は男の欲望の視線の対象であるとしたら、女には女の願望があり、また男の身体をとらえる女の視線もあるはずなのだが、シャブサルは男の視線がつくってきたイメージをそのまま用いる。女が子どもを生みづけて生涯を終えていた時代には、家と子どもは男の所有の対象物であり、女は母として子どもを所有し、成人の男たちをも母の力のもとにおこうとするであろう。「すべての女の体は家である (le corps de toutes les femmes est une maison)⁽¹⁰⁾」という、女主人公の台詞にある伝統的なイメージは、男からも女からも支持されて続いてきたものである。だが小説の女主人公は、ジャーナリストとしての自分の経歴をもち、自分の財産を自分で管理している。この恋愛には二つの自我がありつづけ、「小さな家」とよばれる共通の一つの家に合体することはついに起らない。生き方の変化にもかかわらず、恋愛の成就是「家に一緒に住む(habiter ensemble une maison)」と意識され、矛盾が露呈すると恋は家にたいする執着によってかわられる。

この恋愛物語はしたがって、まるで不動産の取得、売却、譲渡の記録のようにして回想されてゆく。恋人に出会ったとき、女主人公は、3つの不動産を所有し、その第1としてパリ市内のマンションの六階に大きなアパートマンを持っている。長年住まってはいるが、よい思い出はないらしい。このアパートマンに付される形容詞は、「以前に住んでいた」(ancien)は無価値であるとしても、残りは「古い」(vieux), 「空虚な」(vide), 「さびしく冷たい」(solitaire et glacé)と、けなし言葉に限られている。この家はずっと女主人公の最初の結婚のとき、夫の両親が若夫婦に買い与えた新居であったが、或日その夫はかばん一つを持って出てゆき、アパートマンは彼女に残されたのであった。

第2は先きに郊外建売り住宅として記述を引用した週末の家であって、女主人公はこれを恋人に会う直前に自力で購入し、住みはじめたばかりである。

第3は、女主人公の少女時代の家であってリムザン地方にある。

“Pour notre premier été, j’emmène Bernard et Ignace dans ma maison du Limousin. Dire qu’elle est à moi, c’est trop! Je la possède en indivision avec ma sœur, et ma mère en conserve l’usufruit”⁽¹¹⁾

「私たちの最初の夏休みを過ごすため、私はベルナルとイニヤスをリムザンの私の家へ連れて行った。私の家とは言い過ぎだ！

私はその家を姉と共同所有しており、母は用益権を有している」

法律用語を用いた記述は不必要なほど正確であり、また打ち明け話のように生々しい。この家からは、正面に二つの丸い山が見え、山には泉が湧いていることになっている。むろんこの家が女主人公にとっては母の家であることを表わす。しかし十七世紀に大きな石を積んで建てられた家は火をたいて暖めるのに時間がかかり、いくら暖めてもぬくもりがない。家の冷たさで、不妊を表わそうとするのは、あまりに使い古された象徴表現手法であるのだが。

文中の登場人物ベルナルが女主人公の恋人であり、イニヤスは彼の男友達である。ベルナルとイニヤスは二人とも富裕な独身生活を長く送ってきており、女主人公とベルナルというカップルがつくられた後も、行動を共にする。女主人公とベルナルの恋が続く4年間のあいだの4度の夏休みのうち、第3と第4の夏は、イニヤス所有の「川のほとりの小さな城」(un petit château au bord de la rivière)で過される。イニヤスは大きな会社をもっているらしく、将来をきめかねて猶予の時を送っていたベルナルは、女主人公がはげますジャーナリスト修業を経たのち結局はイニヤスの助けを借りて実業界に入り、フランスと中国とのあいだを忙しく往復する身になる。

ベルナルの方は、パリの、自分が生まれた世襲のアパルトマンに住んでいる。父の遺産としては、パリ近郊に「ロレ (l'Orée)」と呼ぶ大きなブ

ルジョア風の週末の家があって、母親の所有となっている。この家の横には「小さな家」と呼ばれた子供部屋として使っていた家があり、これはベルナールが相続していたが、彼はこれを売り、「大きな家」と「小さな家」のあいだには醜い壁が立っている。

恋愛の最初のあいだは、男が女のアパルトマンに通ってくるが、ベルナールは女主人公のバリのアパルトマンも、第2の週末の家も第3の田舎の家をも嫌う。

“《Je hais ton appartement, finit-il par me dire, viens donc habiter le mien.》”⁽¹²⁾

「とうとう彼は私に言った。『僕は君のアパルトマンが大嫌いだ、だから僕のアパルトマンに住みに (habiter mon appartement) おいでよ』」

ベルナールは自分のアパルトマンを改造して女主人公をそこに迎えるが、改造の費用は女主人公の負担となる。こうして、独身の男女の二つの家計が一つのものになりはじめる。家族間の交際もはじまり、女主人公とベルナールの4年間のあいだに4度あるノエル(クリスマス)の第1回は、女主人公の「以前のアパルトマン (dans mon ancien appartement)」に、その昔に離婚したままの女主人公の父と母および姉つまり女主人公の家族と、ベルナールとイニヤスを呼んで祝う。女主人公の父親は彼女が幼い頃、ノエルの前夜に家出したのであった。第2回のノエルは改装のため壁に塗ったペンキがまだ乾いていない「彼のアパルトマン (dans son appartement)」でイニヤスだけを招いて祝う。第3回は改装が終り、家具のすえつけもすんで輝やくばかりの「あのアパルトマン (l'appartement)」において、父を含む女主人公の家族とベルナールの母親と姉そしてイニヤスつまり両方の家族の集合する「家族の大ノエル (au grand Noël familial)」において女主人公は「主婦の役 (mon rôle, celui de maîtresse de la maison)」を果たしたのであった。第4回は、「ロレ (à l'Oree)」で祝うが、やはり女

主人公の主婦としての活躍があった。その夜、ベルナールは女主人公にささやく。

“《L'année prochaine, nous fêterons Noël dans notre petite maison》.”⁽¹³⁾

「『来年は僕らのノエルを僕らの小さな家で祝おうね』」

この約束が果されずに終わったことも女主人公の恨みを深くしている。「小さな家」を買い戻し改造して住むことを最初に提案したのは女主人公であった。

“Plus j'habite la grande maison, plus la petite grandit en moi.”⁽¹⁴⁾

「大きな家に住めば住むほど (habiter la grande maison) 小さな家が私の心の中で生長していった」

大きな家に住むとは、女主人公がベルナールの家族の一員として認められたことを意味する。しかしロレは厳密にはベルナールの母親の家であるから、女主人公はその傍にある小さな家を買戻してベルナールと自分だけの家にしようとする。女主人公は自分の所有の第2の家、郊外の建売住宅を売り、ベルナールの母親はリゾート地のワンルーム・マンションを売り、その金をあわせて「小さな家」を買戻し、境界の壁をとり除く。その後2年をかけてする改造の費用も女主人公の負担であったが、この家がベルナールの育った家であるところから、恋が終ったとき、女主人公は家から追放されることになる。ベルナールの親族を代表するおじは女主人公に「あなたは賭に負けたのだ」と告げる。

女主人公のその後の思いは、若い恋人に向うよりは、むしろかつては彼と自分の住んでいた、そして現在は彼だけが住んでいるアパートマンと、完成が間近かであった「小さな家」へと向う。

“Reste que les souvenirs de la maison jamais habitée me soutiennent, par cet hiver glacial.”⁽¹⁵⁾

「その凍りつくような冬のあいだ、決して住まれることのなかった家 (la maison jamais habitée) の記憶が私を支えたことに変わりはない」

ここでは、〈habiter〉は受動態をとる。決して住まなかったためよけいに未練が残る家に、女主人公は夢遊病にかかったように出かけてゆき、無人の家で一晩を過す。女主人公が見まわして目を止める物体にはすべて所有形容詞が付されている。

“Aux murs, mes tableaux et mes dessins, qui tont à coup me parurent depourvus de sens et de raison d’être. Mes tapis recouvraient le plancher poussiéreux, mes objets de toilette étaient sur la tablette du lavabo, mes pulls dans les armoires... Ma 《présence》 était demeurée, et je n’y étais plus!”⁽¹⁶⁾

「壁には私の画と私のデッサンがかかっていたが、私の目にはとつぜんその意味と存在理由が失われたように思えた。私のじゅうたんが埃をかぶった床をおおい、私の化粧道具が洗面所の棚の上にあり、引き出しには私のセーターが入っていた。私の《存在》はあるのに、私はそこにはもういなかったのだ！」

女主人公にとって、この家からの追放は、そのまま自分の存在感の喪失を意味したということをよく説明している文章である。所有形容詞は庭の花、家庭菜園の野菜の上にも付されている。

精神医はベルナルと母親の許可を得た上で女主人公をロレに再び連れて行き、そこで共に数日を過しながら例の治療をほどこす。女主人公は治療をうけいれて、恋人をあきらめるのであるが、家には翡翠の指輪を残して呪いをかける。

“《Il est beau, mon jardin, ai-je dit sans me retourner.
—Oui》 m’a-t-elle répondu, sans ajouter:《C’est le mien!》”⁽¹⁷⁾

「私はふり向かぬまま、(ベルナールの母に),『私の庭はきれいなね』と言った。彼女は私に『そうね』と言い、『あれは私のよ』とは言わなかった」

だが、女主人公が撤退するやいなや、「小さな家」とベルナールのアパートマンの錠前は新しくとりかえられ、女主人公が持っていた鍵は使えなくなる。真夜中に女主人公が鍵穴に鍵をさしこんで開かないことに愕然とする場面は、沖田吉穂のいう〈habiter〉の「排他的な性格」をよく表わしている。小説中の他の場面には、家に武器を置くかどうか、という会話もある。むろん家を護るためである。

女主人公は占い師に、恋ではなく、いつまでもあきらめることのできない家について尋ねている。

“A ma seconde visite chez Bertrand, j'avais hâte de lui poser ma question: 《Croyez-vous que je pourrai un jour habiter ma petite maison?

—Je ne crois pas que ce soit recommandable... me répond-il en hochant doucement la tête.

—Pourquoi?

—Si cette famille n'habitait pas là...

Mais cette proximité est mauvaise pour vous”⁽¹⁸⁾

「ベルトラン（占い師）を二度目に訪問したとき、私はいそいで尋ねた。『いつの日か、私は私の小さな家に住むこと(habiter ma petite maison) が出来るでしょうか』

『おすすめでできませんなあ』と彼はゆっくりと頭をふりながら答えた。

『なぜですか』

『もし、あの一族があそこに住まなければ、の話ですが…そうなることはあなたにとって良いことではありませんよ』

予言どおり、女主人公の「私の小さな家に住む」(habiter ma petite maison)という願いは、恋人の失踪という不幸な事件とひきかえに実現する。ベルナールは母親にもういちど「小さな家」を売っていた。母親は、あれは失踪するために生まれて来たような子であり、再び母親の傍に帰ってきて住むことはしないであろうと言い、女主人公に次のように乞う。

“『J'aimerais que vous veniez l'habiter』, me dit Nunu.”⁽¹⁹⁾

「『あなたが来てあの家に住んで (l'habiter) くださればいいとおもいます』とニュニュ (ベルナールの母) は私に言った」

〈habiter〉はここでは、直接目的補語代名詞をとって、他動詞であることが強く意識されている。女主人公は今後、自分の存在の中にもぐりこむようにして「小さな家」に住み、これを所有するであろう。物語の結末において読者は翡翠の家という題名には、霊にとりつかれた家 (la maison habitée par l'esprit) という意味がこめられていたと悟ることになる。物語の全体が〈habiter〉の意味の中でも、所有する、とりつくという積極的な働きかけのある、他動詞的な意味によりかかってつくられている。

シャプサルの『翡翠の家』は、第1回の共同研究でとりあげたロブ＝グリエの『嫉妬』と同じく⁽²⁰⁾ 家と、その内容である家族の所有をテーマにしている。シャプサルにも『嫉妬』という題の対談集があるのだが、ロブ＝グリエの小説『嫉妬』においては、不貞の疑いをかけられた妻は結局、男の家に帰ってくる。ところがシャプサルの『翡翠の家』は女の家であり、男は脱走をつづける。男の家でもあり女の家でもある家は、現実および小説の中に、あるのだろうか、あり得ないのだろうか。

なお、『翡翠の家』は80の小さな章に分かれているのだが、最後にたった3章を使って、女主人公がこんどは年上の男とする再婚と死別が簡単に記されている。この短い物語にもまた年上の男レイモンの好ましい田舎の家、女主人公に買い与えるエッフェル塔のみえるアパルトマンが描かれて

いる。

“Je vais de fenêtre en fenêtre, prenant possession de《ma》
vue. L'appartement est à mon nom.”⁽²¹⁾

「私は『私のもの』である眺望を自分のものにしながら、窓から
窓へと歩む。アパルトマンは私の名義である」

女主人公はレイモンという男ではなく、その住居と結婚したかのような。
そして、短い結婚生活の後に死別があり、昔の恋人ベルナールの母親は富
裕な未亡人である女主人公に「小さな家」へ来て住むように乞うのである
から、女主人公は男たちのいない空虚な家をいくつも所有して終ることにな
る。この空虚が現在のフランスの読者大衆を満足させる小説の大団円であ
ることの皮肉は、作者にも読者にも十分に自覚されてはいない。女主人
公が最後に自分のものとして住む家はすべて住居雑誌用の美しい形容詞で
形容され、復讐の喜びと所有の満足に輝やいている。

小説の途中にはまた、大筋とは関係のない次の文章がはさまれている。

“Au bout de l'autoroute, il y avait une nationale, puis de
petits chemins. Je croyais n'aimer que ma campagne, et voilà
que j'aime celle de Raymond. Il faut dire qu'elle est française.
Partout en France je suis chez moi. Un peu en Suisse, aussi,
à cause de ces deux-là qui s'y sont aimés pour m'y
concevoir.”⁽²²⁾

「高速道路の末端には国道があり、それから細い道に入った。私
は自分の田舎しか好きではないと思っていたのだが、今ではレイ
モンの田舎を愛している。フランスの田舎でなければならないと
いうことは言い添えねばならない。フランスであればどこでも、
私は自分の家にくつろぐ気持になれる。それと、私の両親が愛しあ
って私を懐任したスイスの田舎でも少しはそのような気持になる。」
郷土にたいする愛着とさらには愛国心が、住居にたいする執着の延長と

して、かくも易々と語られていることは注目に値いするであろう。先きに触れた欲望の体系を肯定しその上に築かれるナショナリズムは、〈habiter〉という動詞が持っているのと同じ「排他性」を持つはずである。政府の持ち家政策が押しすすめられている日本においても、将来、〈すむ〉の内容は〈habiter〉のような積極性を帯びることが考えられる。家族と家についての共同研究はさらに大きなテーマに行きつくことが予想されるのである。

注

- (1) インタビュー＝マドレーヌ・シャプサル、『嫉妬』（鈴木晶訳）、サンリオ、1978
- (2) cf. マルセル・グリオール『水の神』（坂井信三、竹沢尚一郎訳）、セリカ書房、1981
- (3) バシュラール、『空間の詩学』（岩村行雄訳）思潮社、1984、p.42
- (4) Madelaine Chapsal, *La Maison de jade*, Grasset, 1986, p.263
- (5) *ibid.*, p.53
- (6) *ibid.*, p.61
- (7) *ibid.*, p.14
- (8) *ibid.*, p.15
- (9) シャルル・ボードレール『悪の花』（多田道太郎編）、平凡社、1988、p.527
- (10) Madelaine Chapsal, *La Maison de jade* p.426
- (11) *ibid.*, p.141
- (12) *ibid.*, p.64
- (13) *ibid.*, p.215
- (14) *ibid.*, p.166
- (15) *ibid.*, p.210
- (16) *ibid.*, p.355
- (17) *ibid.*, p.432
- (18) *ibid.*, p.414
- (19) *ibid.*, p.471
- (20) 西川祐子「目としての窓—ロブ＝グリエ著『嫉妬』論」、『国際研究』第3号、p.231

(21) Madelaine Chapsal; *La Maison de jade*, p.460

(22) *ibid.*, p.449